2018 年 12 月 30 日

福音書からのメッセージ

律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。
（ヨハネによる福音書1章17節）

「初めに言(ことば)があった。言は神と共にあった。言は神であった」から始まるこのヨハネ福音書の冒頭ですが、何回読んでも何のことかよくわからないという方も、正直多いのではないかと思います。「ことば」とは何でしょうか。聖書では、「言」という一文字を使って「ことば」と読ませています。通常あまり用いない読み方です。この単語はもともと「ロゴス」というギリシア語ですが、どのような日本語にするか、大変苦労したようです。

1837 年に聖書を日本語に翻訳したギョツラフという人は、この「ロゴス」を「賢い者」と訳しました。さらに「言霊」や「道」、「み言葉」などなど、様々な翻訳が登場していきます。

さて、「ことば」に関して、もう一つわたしたちが心に留めておかないといけない箇所があります。それは創世記の最初の部分です。神さまはこの世界の始まりに、「光あれ」と言われたとあります。つまり「ことば」によって、天地創造は開始されたのです。ある人はこの「ことば」とは、神さまの思いなのだと言いました。

つまりこういうことです。神さまの思いは天地創造のとき以来、世にありました。しかし世は神さまの思いによって完成したにもかかわらず、世は神さまの思いを認めなかったのです。神さまの思いは自分の民のところに届けられていったのですが、民は受け入れなかったのです。

これがわたしたちの現実なのです。わたしたちは神さまの思いに背を向けて生きてはいないでしょうか。神さまはモーセを

通して律法を与えられました。そこには神さまの思いがありました。その律法を守って、自分の前に清い者であってほしい、そのように神さまは思っていたことでしょう。しかし結果的に、人間は律法を守ることはできませんでした。形式的には守っていると思っていたかもしれません。でも神さまを愛し、隣人を自分のように愛すること、それができないのです。

それどころか、この人は隣人ではないと排除したり、周りの人が苦しんでいたり悲しんでいたりする姿から目を背けてしまう。自分を大事にし、他の人のことはどうでもいい。それがわたしたちの姿なのではないでしょうか。

しかし神さまのみ心は、わたしたちが誰一人として滅びることなく、生きること、神さまのみ前に生きる者となるということです。わたしたちがどんなによごれていても、思いや言葉やおこないによってよくないことばかりしていても、受け入れる。それが神さまの思いなのです。

ことばは肉となって、わたしたちの間に宿られた。神さまはそのために、わたしたちの間にイエス様を与えてくださいました。

桃山基督教会

〒612-8039
京都市伏見区御香宮門前町 184
TEL/Fax　075-611-2790
メール momoyama.kyoto@nskk.org
＜教会ホームページ＞
http://momoyama.hannnari.com/